

うたくと

の反帝国主義運動を指導するなかで、はじめて農民運動にとりくんだ。秋、広州にいき国民党宣伝部で活動、26年には農民運動講習所長となったが、7月、北伐の開始とともに上海に出、中共農民運動委員会書記となった。27年3月、「湖南農民運動視察報告」を発表し、国民党の離反を恐れて農民運動をおさえようとする、陳独秀ら中共指導部の日和見主義に反対し、極左分子として非難を受けた。

(3) 土地革命戦争期 国共分裂後、中共を支配した極左路線に抗し、かれは独自の判断で井崗山にはいり、根拠地の建設と土地革命に着手した。中共中央からは異端視されながら、江西・福建両省の省境に根拠地を發展させ、李立三路線による打撃(長沙強攻の失敗。楊開慧夫人はこのとき国民党に処刑された)を克服し、国民党軍の3回にわたる包圍討伐を粉碎し、31年には江西南部の瑞金を首都に中華ソヴィエト共和国を樹立、毛沢東はその政府主席に選ばれた。その後、中共中央をにぎる王明ら教条主義者に排斥され、実権を奪われたが、教条主義者の指導が根拠地の喪失をまねいた現実の教訓により、長征途上の35年1月、中共は遵義会議で毛沢東を政治局主席、軍事委員会主席に選出した。その後、かれの指導を認めぬ張國燾の分裂行動で危機に陥ったが、一部の紅軍を率いて行軍を続け、10月、陝西北部の根拠地に到達した。

(4) 抗日戦争期 陝北到着後、とくに37年春、延安にはいつてからの10年間、かれはこの本拠を離れることなく、中国革命を指導した。35年の8・1宣言以来、コミンテルン＝王明の右翼的統一戦線論に「逼蔣抗日」の抗日民族統一戦線政策を対置し、遊撃戦争を戦略的中心にすえた持久戦の必然性を説き、38年10月の中共6期6中全会で王明路線を克服した。40年には「新民主主義論」を発表して当面する革命の性格を明らかにし、42年には大生産運動と整風運動を指導して自力更生と大衆路線の確立に貢献した。そして45年、7全大会において、かれは党主席に選出され、毛沢東思想は全党の活動の方針として確認されるにいたった(この間、39年に現夫人江青女史と結婚した)。

(5) 解放戦争期 日本の降伏後、かれは招きに応じて重慶に飛び、蒋介石と国共和平協定を結んだ。だが蒋介石とその背後のアメリカ帝国主義の反動的本性を直視したかれは、党内外に強かった国民党との妥協論を排し、人民の武装と解放区の権力を保持しつづけた。はたして46年、国民党軍が解放区総攻撃を開始するや、陝北を転々としながら戦争の全局を指導し、48年、人民解放軍の総反攻開始とともに河北に移り、49年3月、北京にはいり、新政府の樹立を準備した。

(6) 社会主義建設期 1949年10月、中華人民共和国成立とともに国家主席に就任し、ソ連を訪問して、50年2月、中ソ友好同盟条約を結んだのをはじめ、経済復興、朝鮮戦争(抗米援朝)、三反五反、農業協同化などに指導的役割を果たした。56年のスターリン批判後は、国際共産主義運動内の修正主義的潮流とたたかい、57年には中共代表団長としてモスクワ声明の作成に参加した。国内では人民内部の矛盾の存在と正しい処理のあり方を指導し、57年の百家争鳴・百花齊放、反右派闘争を推進、工農併進の社会主義路線をうちだして人民公社・大躍進の運動を進め、59年には国家主席を辞して党務に専念した。62年、かれは社会主義社会における階級闘争の存在、資本主義復活の危険性を指摘し、国際的には中ソ論争を指導し、国内では社会主義教育運動を發展させ、66年には自ら先頭に立ってプロレタリア文化大革命を發動した。69年4月の中共9全大会は、その勝利を確認し、ふたたび毛沢東思想を中共の理論的基礎として位置づけ、林彪をかれの後継者として指名した。

II 著作・理論 1917年《新青年》に寄稿したく体育の研究》以来、多くの著作があり、主要なものは『毛沢東選集』(既刊4巻、1951～)、『毛沢東著作選読』(1964)におさめられている。かれはまた詩人としても定評があり、『毛主席詩詞三十七首』(1963)が出版されている。かれの理論的貢献は多方面にわたるが、人民戦争の理論を確立した『持久戦論』(1938)など一連の軍事論文、『実践論』(1937)、『矛盾論』(1937)などの哲学論文、大衆路線を定着させた『延安文学・芸術座談会における講話』(1942)など整風文献はとくに有名である。社会主義建設においては、57年の『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』以来、プロレタリアート独裁のもとでの2種類の矛盾、階級、階級闘争の問題を提起し、ソ連共産党などの全人民の党・国家といった修正主義理論に反対する一方、プロレタリアのもとでひきつづき革命を行なうという文化大革命の指導理念を構成した。かれは革命家である。その一家についてみても最初の妻の楊開慧、長男の毛岸英、弟の毛沢民・沢潭、妹の沢健を革命のなかで敵に殺されるという苛烈な戦いのなかで、その思想・理論を構築してきた。マルクス＝レーニン主義の現代における最高峰だとされる毛沢東思想は、徹頭徹尾、革命の実践的課題と対決するなかできずかれた体系なのである。(小野和子)

もうたくとうしろう 毛沢東思想 [英]  
Mao Tsê-tung Thought 中国共産党主席・毛沢東の革命思想、戦略と戦術、世界認識、当

面の社会主義建設の理念などを包括した中華人民共和国の国家的イデオロギーであり、マルクス=レーニン主義の中国的な発展形態ともいえるが、カリスマ的な毛沢東個人崇拜体制の極致において毛沢東思想を絶対化している今日の中国では、毛沢東思想をマルクス=レーニン主義のたんに中国的発展形態としてみなすことを拒否し、それをマルクス=レーニン主義の現代における最高の発展形態だとみなしている。1965年後半より開始された、いわゆるプロレタリア文化大革命は、このような毛沢東思想で純血化された中国共産党の再建と毛沢東思想による権力支配の一元化を求めて毛沢東自身が発動した激烈な党内闘争であり、広範な大衆をこの闘争にまきこんだ「大衆運動化された権力闘争」であったが、文化大革命の勝利を画した1969年4月の中国共産党9全大会では、新しく採択された党規約の「総綱」のなかで、毛沢東思想はつぎのように定義されている。すなわち、そこには「中国共産党は、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想を自己の思想を導く理論的基礎とする」とあり、従来の「マルクス=レーニン主義」という表現から「マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想」という表現への変化にみられるように、マルクスの時代、レーニンの時代と異なった毛沢東時代の到来が歴史的に区分されて公式に唱導されたあと、「毛沢東思想は、帝国主義が全面的崩壊に向かい、社会主義が全世界の勝利に向かう時代のマルクス=レーニン主義である」とされているのである。ここにみられるように、毛沢東思想とは、たんに毛沢東の革命思想一般をさすものではなく、それは毛沢東的な理論と実践の一つの包括的な体系であり、中国共産党は公式には用いないが、まさに毛沢東主義(Maoism)といいかえることができるものである。いうまでもなく、そこには、毛沢東思想こそ現代における唯一の正統的なマルクス=レーニン主義であり、むしろその最高の発展だとしてこれを普遍化しようとする願望と執念がこめられているといえよう。

では、このような包括的な体系としての毛沢東思想は、どんな特質をもっているであろうか。中国共産党が毛沢東思想を世界的に普遍化しようとしているその意図にもかかわらず、そこにはやはり、半封建・半植民地の広大な土壌において中国民族の再生と統一を求める強烈な民族意識のもとに、農民主体的な武裝闘争として展開されてきた中国革命の特徴がそのまま反映しているといえよう。つまり、毛沢東思想の基本的な性格としては、①農民とくに貧農・下層中農に依拠した農民主体的な革命経験の絶対化、②きわめてユニークな遊撃戦の戦略と戦術およ

び「政権は銃口よりうまれる」(毛沢東)という信念にみられる毛沢東軍事思想の全面的発現、③このような中国革命の経験を「中華思想」の拡大再生産ともいえる民族意識でささえている強烈なナショナリズム、を数えあげることができよう。

ところで、中国共産党において毛沢東思想という用語が最初に用いられたのは1943年の劉少奇の論文『党内のメンシェヴィズムを掃せよ』においてであり、ここで称えられた毛沢東思想は、1945年の中国共産党7全大会党規約で党の指針として定式化された。しかし、56年の「スターリン批判」を契機に個人崇拜防止への考慮がなされ、同年の中国共産党8全大会党規約においては毛沢東思想という用語が削除されたのであった。ところが、中ソ論争の激化とともにふたたび毛沢東思想の優位性が強調されるようになり、ついで、毛沢東思想の定式化をはかった劉少奇その人を最大の敵としてたたかわれた文化大革命を経て、今日の毛沢東思想の位置が確定したのである。(中島 頼雄)

もうりしげよし 毛利重能 生没年不詳  
くわしくは、毛利勘兵衛重能というが、伝記はなにも伝わっていない。その生没年月はいうまでもなく、信頼すべき資料に基づいたものは、なにも伝わっていない。その著書『割算書』の巻末に、「摂津の国武庫郡瓦林の住人であるが、いまは京都に住む。割り算天下第一と号する者である。元和8年の初春」と書いてあるので、17世紀の初期に活躍し、京都で塾を開いて、「そろばん」を教授していたものようである。

毛利が、どのようにして「そろばん」の知識を身につけたのであるかについても、それを伝えるたしかな資料はないが、このころには、支那の程大位が著わした『算法統宗』(1592)が、朝鮮を経てわが国に伝わっていたので、これによって、「そろばん」による「割り算」の知識を得たのであろう。

毛利が著わした『割算書』は、日本人の手になる数学書の第1号である。これは24葉の小形の冊子であって、「そろばん」による割り算とその応用について述べたものであるが、独創的な著述ではない。この書物の内容を、『古代数学集(上)』(日本古典全集)によって、ながめると、これは、支那で行なわれていた「そろばん」による割り算の方法を伝え、その日常生活の問題や測量の方法への応用について述べたものであるが、素朴な内容のものである。毛利には、吉田光由、今村知商、高原吉種という3人の門弟があったが、この3人は和算の形成に重要な人物であった。(小堀 憲)